

Title	巻頭のことば
Author(s)	小倉, 義明
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume25, 2010.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3254
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

アメリカの新大統領バラク・オバマ氏は、「変えられる」をスローガンにした。オバマ氏は彼の尊敬する先達の事蹟を念頭に置いているが、その先達はいずれも各時代の深刻な焦眉の課題と取り組んだ人たちである。オバマ氏は自分の取り組む課題が、同様に、極めて解決困難なものであることを承知している。困難を承知で、彼は「変えられる」と言いつづけた。

一月二〇日の就任式演説は、従前の演説と比べて基調は同じだが、相違も見受けられた。まだ候補者であった時は消沈する民心を振り立たせるアピールで良かった。しかし当選し就任の段階になれば、それだけでは足りない。希望や目標を語っているだけではダメで、政策実行の責任がせり上がってくるのだ。そこで、ある評者は就任演説のトーンを「We can change から We must change へ」の転換だ、と言った（沢田 博）。

*

オバマ氏は希望を語ると共に、責任をも訴えた。国家社会の再建の根底には、倫理的質の充実がなければならぬ、と考えているのである。金融のデプレッションも産業のリセッションも、そして外交も軍事も、詮ずる所、希望を堅持し責任を負担し切れるかという個々人の倫理的力量的の問題にまで行きつくであろう。

就任式演説の末尾に至って、オバマ氏は合衆国建国時のジョージ・ワシントンに言及して、次のように言った。

「建国の年、厳寒のさなか独立革命派の小さな部隊が、凍っていた川の岸边で消えそうな焚き火をかこんで身を寄せ合っていた。首都は放棄された。敵は進軍して来ていた。雪は血で染まっていた。独立革命の行く方が最も危

ぶまれていたその時、建国の父は次の言葉を読むようにと部下たちに命じた。(将来の世界がこう語るようにしようではないか。希望と美徳しか生き残れない真冬の日に、都市と田舎はともに共通の危機に立ち向かった、と)。

実際、あの年の十二月はワシントン麾下の軍は食料・弾薬・装備のすべてに欠乏し、士気は絶望的なほど消沈していた。そこへ、同月十九日付の『フィラデルフィア・ジャーナル』が届いた。同紙にトマス・ペインが「アメリカの危機」を寄稿していた。ワシントンは一読するや、これをクリスマス・イブの日に各連隊ごとに読むようにと命じた。かくて年末から翌一月にかけて、目の覚めるような逆転劇をやつてのけたのである。トレントン奇襲であり、プリンストンでの勝利である。

翌一七七七年から七八年にかけての冬も、同様であつた。飢えと寒さと病気のため、一万余名いた部隊は三千名に減つてしまつていた。それでも、ワシントンは踏み留まつた。有名な「ヴァレー・フォージの冬」である。

*

オバマ新大統領は、ジョージ・ワシントンの事蹟にインスパイアされている。建国の父は、絶望的な事態に何度も遭遇したが、その都度忍耐を持つて踏み留まり、あるいは勇気を持つて撃つて出た。多くの評者が言うとおり、ワシントンは革命の大義への使命感と自分の職務への責任感に生きた人であつた。

深刻な諸課題に圍繞されている現代の冬のさなか、オバマ大統領はワシントンやリンカーンやルーズベルトやケネディやキング牧師らに励まされて、希望と責任を語る。真の「変革」は、そうした人格の質的転回から来るであらう。日本にいる私たちも、同様の志を持つて「日本社会の変革」に取り組んでゆこう、と密かに心を固める。

聖学院キリスト教センター所長 小倉 義明